

「流通過程および再生産過程の実体的諸条件」とはなにか

——『資本論』第2部形成史の一齣——

大 谷 禎之介

はじめに

筆者は、拙稿「『資本論』第2部仕上げのための苦闘の軌跡——MEGA第II部門第11巻の刊行によせて——」（『経済』、2009年3、4、5月号所載）で、マルクスが1864-65年に第2部のための原稿としてその第1稿を書き下ろしたのち、1881年に第2部のための最後の草稿となった第8稿の筆を措くまでのあいだに、この部を完成しようとして行なった苦闘の過程を辿り、そのなかでマルクスが獲得していった認識の深化を跡づけようと試みた。この論稿は、2008年に刊行されたMEGA第II部門第11巻（以下、MEGA II/11と略す）で筆者が執筆した「解題 [Einführung]」の内容を中心としたものであったので、1988年刊行のMEGA第II部門第3巻第1分冊（以下、MEGA II/3.1と略す）に収められていた第2部第1稿については、第11巻所収の第2部第2稿から始まる諸草稿への関連で言及しただけだった。そのため、これらの草稿と異なるその特徴を対比的に挙げるにとどまり、第1稿そのものに即して説明する点で不十分であった。

とりわけ、第1稿、第2稿、第8稿と三たびにわたって執筆された第3章——第1稿および第2稿での「章」はのちに「篇」と呼び換えられたので第8稿では第3篇——の課題についてのマルクスの把握について、第2稿第3章でのタイトル「流通過程および再生産過程の実体的諸条件」が、第1稿での第3章の課題設定を引き継いだものであったことは述べたものの、マルクスが第1稿のときにこのタイトルのもとでどのようなことを考えていたのか、第2稿の執筆時にもこのタイトルで第1稿のときと同じことを考えていたのか、ということマルクスの叙述に即して説明することはしなかった。

本稿では、第1稿を引き継いで、第2稿の第3章に付された「流通過程および再生産過程の実体的諸条件」というタイトルでマルクスがどのようなことを考えていたのか、ということをも、まず第1稿でのマルクスの記述から読み取り、それが第2稿にどのように引き継がれ、またどのように変更が加えられたのか、を見ることにしたい。

なお、2012年の秋には、MEGA 第II部門第4巻第3分冊（以下、MEGA II/4.3と略す）が刊行され、MEGA の第II部門が完結した。この巻には、第2部のためのいくつかの草稿、とりわけいわゆる第4稿が収められている。本稿では、第4稿についてはこの第4巻第3分冊を利用し、そのページを掲げる¹⁾。

1. 第3章を第1章および第2章から区別するもの

第2稿の第3章は「流過程および再生産過程の実体的諸条件 [Die reale Bedingungen des Cirkulations- u. Reproduktionsprozesses.】(MEGA II/11, S. 340) というタイトルをもつ。第1稿の第3章につけられたタイトルは「流通と再生産 [Circulation u. Reproduktion】(MEGA II/4.1, S. 301) であったが、じつは、第1稿の第3章でマルクスが書こうとしていたものの実際の内容が第2稿第3章のタイトルに合致するものであって、第1稿での「流通と再生産」というタイトルは第2稿での「流過程および再生産過程の実体的諸条件」というタイトルのいわば短縮形であったことは、第1稿の各所での記述から明確に読み取ることができる。

マルクスは第1稿の第3章にはいつてまもなく、次のように書いている。

「資本の総流過程 = 再生産過程のこれまでの考察では、われわれはこの過程が経過する諸契機あるいは諸局面を、ただ形態的に [formell] 考察してきただけであった。これにたいして、今度はわれわれは、この過程が進行できるための実体的な [real] 諸条件を研究しなければならない。」(MEGA II/4.1, S. 302. 以下、引用のなかでの下線はマルクスによる強調であり、傍点は引用者による強調である。)

ここでマルクスは、これまでの第1章および第2章もこれからの第3章もともに「資本の総流過程 = 再生産過程 [der gesammte Cirkulationsproceß = Reproduktionsproceß] を考察する²⁾ のだが、前の二つの章では「この過程 [すなわち資本の総流過程 = 再生産過程] が経過する諸契機あるいは諸局面」をただ「形態的に考察」してきたのにたいして、こんどの第3章では「この過程 [すなわち資本の総流過程 = 再生産過程] が進行できるための実体的な諸条件」を研究するのだ、と言っている。ここで第3章について言われているものが「流過程および再生産過程の実体的諸条件」という第2稿第3章のタイトルと完全に合致している

1) 本稿では、第2部第2稿からの引用にはMEGA II/11の、第4稿からの引用にはII/4.3のページを掲げるが、その引用箇所がエンゲルス版で使われている場合には、MEW版 (MEW 24と記す) のページを付記する。したがって、MEW版のページがついていない引用はエンゲルス版にはない箇所である。

2) ここでもそうであるように、マルクスは第1稿の第1章および第2章で、繰り返して、考察の対象が資本の総流過程 = 総再生産過程であることを明示ないし示唆している。しばしば誤解されているのとは違って、第3章にはいつて初めて総流過程 = 総再生産過程を対象に据えるのではない。

ことは明らかである。このときにこの句で考えていたことを彼はこの少しさきのところで次のように漏らしている。

「さらに、資本主義的生産様式が、支配的に行なわれている生産形態であるばかりでなく、一般的かつ排他的な生産形態であると前提されているのだから、資本家にとってであれ労働者にとってであれ収入をなす諸商品も、不変資本の構成要素をなす諸商品も、まずは資本の生産物として、それゆえまた商品資本として存在するのでなければならない。それゆえ、収入にはいる商品資本と不変資本を形成する商品資本との交換、ならびに不変資本を形成する商品資本の相互のあいだの交換が行なわれなければならない。こうした交換の実体的な [real] 諸条件を研究することがわれわれの今度の仕事なのである。」(MEGA II/4.1, S. 306.)

すなわち、「流通過程および再生産過程が進行できるための諸条件」とは、「資本の生産物」として、したがって「商品資本」として存在する「諸商品」の「相互のあいだの交換」の「実体的な諸条件」である。この「諸商品」とは、一部は消費手段の使用価値形態にある商品であり、他の一部は生産手段の使用価値形態にある商品であるが、マルクスはここでは前者を「資本家にとってであれ労働者にとってであれ収入をなす諸商品」ないし「収入にはいる商品資本」と呼び、後者を「不変資本の構成要素をなす諸商品」ないし「不変資本を形成する商品資本」と呼ぶ。マルクスはここでは、「収入にはいる商品資本と不変資本を形成する商品資本との交換」と「不変資本を形成する商品資本の相互のあいだの交換」との二つを挙げているが、これにはさらに「収入にはいる商品資本の相互のあいだの交換」をも加えるべきであったろう。こうした「商品資本の相互のあいだの交換が行なわれなければならない」のは、それによってのみ、「収入をなすべき諸商品」が資本家および労働者の手に渡って実際に収入となり、「不変資本の構成要素をなす諸商品」が両部門の資本家の手に渡って実際に不変資本となるのだからである。ここでのマルクスはこのように考えているので、貨幣形態での可変資本の前貸も、それによって可変資本が労働力の形態に転化することも、また、労働者が「収入」によって再生産した労働力を商品として資本家に販売することも、そうした「商品資本の相互のあいだの交換」の視野のそとに置かれている。そして、「こうした交換の実体的な諸条件」こそが、ここで「流通過程および再生産過程の実体的諸条件」という句で考えられていたものなのである。

このような「交換」視点に潜んでいた、古典派から引き継がれた制限性はここではひとまずおいて³⁾、「実体的諸条件」の「実体的」という表現に目を移そう。

マルクスは第1章および第2章のなかで、この両章では対象をただ「形態的 [formell, formal]」に考察するのにたいして、第3章では過程の「実体的 [real, reell]」な「諸規定」、

3) この制限性は、第8稿で最終的に払拭される。その経過と意義については、前記拙稿、下、『経済』2009年5月号、187-190ページ、で述べた。

「諸事情」, 「諸側面」, 「諸条件」を問題とし, 「実体的な再生産過程および流過程」を考察するのだ, ということ, を, すでに次のように予告していた。

「流過程にとって重要な実体的な [real] 諸規定は第3章で取り扱われる。」(MEGA II/4.1, S. 140.)

「蓄積が流過程で現われるときの实体的な [real] 諸事情はこの部の第3章ではじめて考察できることである。」(MEGA II/4.1, S. 166.)

「ここでは「 $W_P_W'_G'_W$ 」という「流過程の第2の形態」では, 労働能力は, その出発点ですでに, 買われたものとして現われるのであって, 労働能力の再生産の实体的な [real] 諸条件は, W' の再生産の实体的な [real] 諸条件と同様に, 現われない。」(MEGA II/4.1, S. 166.)

「実体的な [reell] 再生産過程および流過程は, ただ, 多数の諸資本の, すなわちさまざまな産業の諸資本に分裂している総資本の過程としてのみ把握されうる。したがって, これまでの考察方法と違って, 実体的な [reell] 再生産過程の考察方法が必要なのであるが, それは, この部の第3章で行なわれる。」(MEGA II/4.1, S. 182.)

「貨幣資本の商品資本——資本の存在条件——への再転化を妨げるもろもろの例外についての検討は, 再生産の实体的な [real] 諸側面の考察に属する事柄だから, ここでは問題にしない。」(MEGA II/4.1, S. 208.)

また, 第3章の執筆を打ち切ったのちに書きつけた第3章プランの第1の項目(第1節)が, 「流通(再生産)の实体的 [real] 諸条件」(MEGA II/4.1, S. 381)であった⁴⁾。

これらの記述から, ほとんどただちに, 第1稿での, 第3章を第1章および第2章から峻別するキーワードが, 後者における「形態的な [formal, formell]」諸規定ないし形態規定性にたいする, 前者における「実体的な [real, reell]」諸規定, 諸契機, 諸側面, 諸条件であることが読みとれるであろう。

4) 第4稿にも, 同様の記述が見られる。第1章のなかの「生産資本の循環」のところで, 「ここではわれわれは, 意図的に, [資本の貨幣形態から生産要素の形態への] 再転化の实体的 [reell] 諸条件には立ち入らない。というのも, ここでは形態が問題なのだから」(MEGA II/4.3, S. 308), と書いており, また, 「三つの循環における共通なもの」という部分の末尾で次のように述べている。

「しかし, じつは単純な商品流通のところですでに分析されたこの形態的な側面だけでなく, さまざまな資本の変態の实体的な [real] 関連が, つまりじつは社会的総資本の再生産過程の要素としての個別諸資本の循環の関連が, 固持されるのだとすれば, この叙述は, この部分 [すなわち第2部] の第3章ではじめて与えられることができる。それは, 貨幣と資本とのたんなる形態変換からは明らかにされることができない。」(MEGA II/4.3, S. 320.)

2. 「実体的な [real, reell] という語の意味

そこで求められるのは、「実体的 [real, reell] という語⁵⁾ が第1稿ではどういう意味で使われていたのかを、第1稿での記述に即してつかむことである。

ここで、「実体的」という訳語について、一言しておこう。

Der große Duden の Etymologie (1963) によれば, dinglich, sachlich; wirklich, tatsächlich という意味をもつ real は, ラテン語の res (Sache, Ding) を語源とする中世ラテン語の realis (sachlich, wesentlich) から17世紀に借用された語であったが, reell は, その real からフランス語の reel (tatsächlich, wirklich; zuverlässig) を経由して, 独自の意味 (den Erwartungen entsprechend; zuverlässig, ehrlich, redlich) をもつ語として派生したとのことである。だから real と reell は, 語源は同じでも, 本来は, やや異なった語義をもつ別の語なのである。

しかし, 上に挙げた引用に見られるような文脈のなかでは, マルクスはこの両語をとくに区別することなく, 同義に使っていると判断できる。これにたいする対義語である formal および formell についてもほぼ同じことが言える⁶⁾。この, formal, formell と real, reell とのマルクスによる対比的な使用のほかの例としては, 「資本のもとへの労働の形態的 [formal, formell] 包摂」と「実体的 [real, reell] 包摂」との対比を挙げることができる。マルクスは, 『1861 1863年草稿』でこの区別を行なったのち, 『直接的生産過程の諸結果』でさらに詳しく「包摂 [Subsumtion]」のこの二つの形態を論じたが, 「形態的包摂」の場合には圧倒的に formell を使い, まれに formal を使った。「実体的包摂」のほうでは, real と reell との両方を使っている。この場合にも, formal と formell との区別的使用, real と reell との区別的使用は認められない。

また, 言うまでもないことであるが, real にしても reell にしても, formal ないし formell

5) 登場する real および reell という語に圧倒的に「実体的」という訳語を当てたのは, 第1稿の邦訳 (中峯照悦・大谷禎之介他訳『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——, 大月書店, 1982年) が最初であろう。これは, real および reell がでてくれば機械的にこの訳語を当てはめるというによって生じたものではなかった。本文で述べているように, この第1稿の場合, マルクスはこの両語を圧倒的に formal ないし formell の対義語として使っているのだから, 結果的にそうなっているのである。

6) 同じく Der große Duden の Etymologie によれば, die Form betreffend, nur äußerlich, unlebendig などの意味をもつ formal は, ラテン語の formalis (die Form betreffend, äußerlich, förmlich) を語源として18世紀に使われるようになった語であるが, formell は, 同じようにして生じたフランス語の formel を経由して, 独自の意味 (förmlich; unpersönlich, nur zum Schein) をもつ語として派生したとのことである。なお, real および reell についても, formal および formell についても, „Etymologisches Wörterbuch des Deutschen“, Deutscher Taschenbuch Verlag (1. Auflage, 1989) はさらに詳細に語源を明かしている。そのさい, Duden の Etymologie と同じく, reell は real の, formell は formal の項目のなかで扱われている。

との対比でのみ使われるわけではない。たとえば、realer Lohnは「名目賃金」にたいする「実質賃金」である⁷⁾。この場合には、realの対義語はnominellである。マルクスは、『資本論』第3部第1稿の第5篇の「第5節 信用。架空資本」では、monied capitalにたいする「実物資本」をreal capitalと呼んだ。実務的世界でも、「貨幣経済」と区別して「実体経済 [real economy]」と言う。あるいは、realer Sozialismusとは、「社会主義国」と称している国々に「現実に」存在すると考えられた「社会主義」という社会システムを指す言葉であった。このrealの反意語はidealであろう⁸⁾。だからマルクスの場合にも、realおよびreellに、「実体的」ではない別の訳語を当てるべきケースがいろいろあるのも当然である。

要するに、マルクスが第1稿で、第1章および第2章に対比して第3章では「流過程および再生産過程のreal, reellな諸条件」と呼んだときには、このrealないしreellはformalないしformellに対比的に使われているので、それにたいするものとして「実体的」という訳語が適切だろうと考えてこれを使った、というまでのことである。

3. マルクスは「実体的」という語でなにを考えていたのか

さて、マルクスは第1稿で、formalまたはformellにたいする語としてrealまたはreellという語を使ったとき、これらの語にどのような意味をもたせていたのであろうか。

第1稿で、マルクスはしばしば「実体的な変態」という語を使った。この語を手がかりにして、「実体的な」ということでマルクスがどのようなことを言おうとしていたのか、見ていこう。

マルクスは「第1章 資本の流通」の「第1節 資本の諸変態」で資本の循環の形態として、はじめ、四つの形態を示した。このうちの第1の形態は貨幣資本の循環であり、第3の形態は生産資本の循環であり、第4の形態は商品資本の循環であって、この三つの形態は、彼がその後、何度も「資本の循環」についてのこの第1の部分を書き下ろそうと試みたさいにもつねに維持したものであるが、第1稿では、はじめ、このほかに、第2の形態として、貨幣資本が行なう変態 $G \rightarrow W$ の結果としての W を始点および終点とする「 $W, P, W' \rightarrow G \rightarrow W$ 」という循環を設け、この W をも「商品資本」と呼んでいた。だから、販売されるべき商品の形態にある商品資本 W' を始点および終点とする商品資本の循環のほかにそれとは区別されるもう一つの「商品資本の循環」がある、ということになっていたのである。

マルクスは、以上の「流過程」の四つの形態をいちおう見終わったところで、「商品資本

7) たとえば、第2部第2稿には、reale Salaire, realer Lohn (MEGA II/11, S. 438; MEW 24, S. 479 [なお、エンゲルス版では前者はLohn, 後者はnormaler Lohnに書き変えられている]) およびrealer Arbeitslohn (MEGA II/11, S. 498) という語がある。

8) 英語について言えば、real estatesは、「動産 [personal estates]」にたいする「不動産」である。

および貨幣資本は、資本が生産資本としての自己から、つまり本来の生産部面のなかにある資本の存在形態としての自己から区別される、本来の流通部面のなかにある資本の二つの形態である」、と言い、まず商品資本、次いで貨幣資本を「やや詳細に規定 [etwas näher bestimmen]」しようとする (MEGA II/4.1, S. 182)。

「商品資本。 $W' _ G$ 」という小見出しを書きつけたのち、「商品資本」について書き進めるなかでマルクスは、「すぐれた意味での商品資本 [Waarencapital im eminenten Sinn] とは、もっぱら資本によって生産された商品の形態にあって商品として機能しつつある資本である、すなわち商品として売られなければならない (前貸資本としての資本との関連で言えばその貨幣形態が回復されなければならない)、自己の第1の変態をやりとげなければならない、そういう形態にある資本である」、と「規定」するにいたる (MEGA II/4.1, S. 186)。これにたいして、「 $G _ W$ の終りとしての商品にあっては、その商品としての規定は瞬過的 [verschwindend] であり、それはいままさに生産過程にはいり、使用価値として機能し、生産的に消費されようとしているところである。その商品が (固定資本のように)、部分的にその生産過程を越えて生きのびるとか、生産過程の条件として待機しているだけでまだ生産過程にはいっていいないとか、あるいは、過程が実現のはこびにならないとかの理由で、その商品が商品として存在し続けるとしたら、これらの場合にはいずれも、それが商品としてふたたび流通するのは、やはりそれが生産過程の要因としてのその任務をまっとうしていいないからであり、またその場合だけのことである」 (MEGA II/4.1, S. 185 186)。だから、「 $G _ W$ の終りとしての商品」がもつ「商品」という規定は、生産資本として生産過程にはいるまでの「瞬過的」なものでしかないのであって、したがってまたこの形態にある資本は「商品資本としての商品資本」 (MEGA II/4.1, S. 186) ではない。

この把握は、同時に、そのような瞬過的な形態でしかない「 $G _ W$ の終りとしての商品」を始点および終点とする循環を、第2の独自の循環形態として立てることが不要であるだけでなく不適切であったことを認めることを意味した。マルクスはこのあとでも、「第2節 流通時間」のなかで、 $G _ W$ を「貨幣資本の商品資本——資本の存在諸条件——への再転化」 (MEGA II/4.1, S. 208) と呼んでおり、また「第3節 生産時間」では、「資本がその始点のある形態 (これは、 G, \dot{W}, P, W' のいずれであってもよい)」 (MEGA II/4.1, S. 209) とか、「われわれが、 G, \dot{W}, P あるいは W' のいずれを始点とみなそうと」 (MEGA II/4.1, S. 210)、と言ったりして、「 $G _ W$ の終りとしての」 W を始点とする循環の構想を完全には捨てていいないことを示しているが、しかしもはやこの循環そのものに言及することはなくなる。そして、さきの「商品資本。 $W' _ G$ 」のなかの草稿32ページの余白に、次のように書きつけて、循環の形態から「 $G _ W$ の終りとしての」 W を始点とする循環を消し去っている。

「第I循環 $G _ W _ P _ W' _ G'$.
1) 2) 3)

貨幣_商品_生産過程_商品_貨幣。

第III循環 $W' _ G' _ W _ P _ W'$.

$W' _ C _ P _ W'$ (ないし W'').

この循環は、 W (これは生産過程にはいる) $_P_C_W$ と同じだ、というのも、一方の資本家にとっての G_W は他方の資本家にとっては W_G だからだ。

第II循環 $P _ C _ P$.

$P _ W' _ G' _ W _ P$ (ないし P').」 (MEGA II/4.1, S. 190.)

この最後の「第II循環」は、はじめ「第IV循環」と書き、そのあとで「IV」を「II」に書きかえたものである。ページの余白に書かれたこの書きつけは、あとから書き込まれたものである可能性があるので、その前後の部分と繋がっているものとして見ないほうがいいと思われるが、いずれにせよそれは、第1稿の執筆中 (それもたぶん第1章を書き終えていないうち) に、当初設けた「第2形態」がなくされたことをはっきりと示している。

さて、マルクスは、「循環」の三つの形態の構成部分をなす、 G_W , P (生産過程), $W' _ G'$ という三つの変態を立ち上げて分析するなかで、これらの変態について、「形態的な変態」と「実体的な変態」という区別を行なっている。

第1に、流過程で行なわれる G_W および $W' _ G'$ という変態が資本の「形態的な変態」であるのたいして、 P (生産過程) は「実体的な変態」 (MEGA II/4.1, S. 148, 165, 176, 202, 368, 369) を行なう「実体的な過程」 (MEGA II/4.1, S. 147) であると言う。なぜなら、 P は、「生産過程の実体的な要因である生産手段および労働能力」 (MEGA II/4.1, S.144) という「労働過程の実体的な諸要因」 (MEGA II/4.1, S.147) がそれらとは異なった使用価値をもつ生産物に転化する変態であり、過程だからである。ここで「実体的」という語で考えられているのが、生産過程における生産諸要因の使用価値の消滅と生産物の形態での新たな使用価値の誕生であることは明らかである。

第2に、 G_W および $W' _ G'$ という変態は、どちらも、流過程で貨幣が商品に、商品が貨幣に変わるだけの「形態的な変態」ではあるが、この二つの変態には次のような区別がある。 $W' _ G'$ は、商品の形態から貨幣の形態へのまったくの形態的な変態でしかないが、それに続く G_W のほうは、上記の意味での生産過程の実体的な諸要因をなす諸商品への転化であり、 $W' _ G'$ における W' とは使用価値を異にし、生産過程によって規定された特定の使用価値形態をもつ商品への転化である。マルクスは、この点から見れば、 G_W は「実体的な変態」であると見て、次のように言う。

「 $[W' _ G' _ W$ のうちの] 第1の部分 $[W' _ G']$ はまったく形態的であり、もう一方の部分 $[G_W]$ は、生産されるべき商品の、特殊な物品としての、使用価値としての性質によって規定されており、そして、生産された商品が貨幣への蛹化を介してその実体的な存在諸条件にこうして再転化することとして、つまり実体的な変態として規定されている。」

(MEGA II/4.1, S. 181.)

「…… G_W の場合には、実体的な素材変換が、そしてこれを最初の W' との関連で見れば、実体的な変態が、すなわち、 W' の、その生産諸条件への、労働過程の諸要因への分解が行なわれている……。」(MEGA II/4.1, S. 215.)

このような観点から W'_G' と G_W という流過程の内部での変態を見れば、「資本の最初の流通段階あるいは変態段階である G_W 」は、「同時に実体的な変態の一契機でもある」(MEGA II/4.1, S. 153) のであり、 W'_G' という「諸商品の形態的な変態は、……ただ、諸商品の実体的な変態の形態的な媒介として現われるにすぎない」(MEGA II/4.1, S. 165) のであり、このように、「資本の変態では、形態的な変態は、ただ、 W の W' への転化という一つの実体的な変態の形態として現われるにすぎない」(MEGA II/4.1, S. 148), ということになる。だから、「生産物が順々に通過するさまざまな生産過程は、それぞれが、その生産物の総生産過程・再生産過程の諸段階を、生産物が使用価値としてのその最終の姿を受け取るまでに通過しなければならない実体的な変態列の諸段階をなしている」(MEGA II/4.1, S. 367) のである。

第3に、マルクスは第1稿の第3章のなかで、「ある生産部面から他の生産部面への資本の移動」について、「これは、また、資本の一つの変態でもある」と言い、次のように、「再生産における資本の実体的な変態」だと言っている。

「再生産における資本の実体的な変態。再生産過程は（前貸された価値から見ればおなじ生産規模である場合でさえも）その大きさについて言えば可変的である……が、そのほかに、資本が再生産されるさいの現物形態の可変性——ある限界のなかでの——についても述べなければならない。第1に、資本（当初の旧資本または追加資本）は、同じ生産物の姿態で再生産されないで、すでに以前から存在している他の一生産物の姿態で再生産される [ことがありうる]。これは、旧資本がさまざまな生産部面に [それまでとは] 別様に配分されるというのであれ、また追加資本、剰余資本が、自分が生まれた生産過程ではなくて、それと並んで存在する他のある生産部面に投下されるというのであれ、それはある生産部面から他の生産部面への資本の移動なのである。これは、また、資本の一つの変態でもある。しかも、一般的利潤率への均等化はこの変態にもとづいているのだから、非常に重要な変態である。」(MEGA II/4.1, S. 369.)

以上、マルクスが第1稿で「実体的変態」と呼んだものを見てきたが、見られるように、いずれも、使用価値の姿態の変化を伴う変態、過程である。

real という語のこのような含意は、『経済学批判。第1分冊』で、労働の二重性のうちの具体的有用的労働を reale Arbeit と呼んだときの real の含意に通じるものである。マルクスはそこで、「素材の富の源泉としての具体的労働、要するに使用価値をつくりだすがぎりでの労働」(MEGA II/2, S. 115), 「形態と素材とに応じて際限なくさまざまな労働様式に分か

れる具体的かつ特殊な労働」(MEGA II/2, S. 115) を reale Arbeit と呼んだが、ここの real も、それぞれ異なった特定の形態で支出され、それぞれ異なった使用価値をもたらすという意味で「実体的 [real]」と言われたのであった⁹⁾。

「商品を二重の形態の労働に分析すること、使用価値を^レ実体的労働 [reale Arbeit] すなわち合目的な生産的活動に、交換価値を労働時間または同等な社会的労働に分析することは、イギリスではウィリアム・ペティに、フランスではボアギユベールに始まり、イギリスではリカードに、フランスではシモンディに終わる古典派経済学の一世紀半以上にわたる諸研究の批判的な最終の成果である。」(MEGA II/2, S. 130-131.)

「彼 [ペティ] は重金主義の諸表象にとらわれて、金銀を獲得する特殊の種類の^レ実体的労働 [reale Arbeit] を、交換価値を生みだす労働だと説明した。」(MEGA II/2, S. 131.)

「ステューアトが彼の先行者たちや後継者たちよりぬきんでていた点は、交換価値に表わされる独特な社会的労働と使用価値を目的とする^レ実体的労働 [reale Arbeit] とをはっきりと区別した点である。」(MEGA II/2, S. 135.)

「アダム・スミスは、農業、製造工業、海運業、商業等々のような、^レ実体的労働 [reale Arbeit] の特殊な諸形態を、次々に富の真の源泉であると主張してから、労働一般 [die Arbeit überhaupt] が、しかもその社会的総姿態での、分業としての労働一般が、素材的富つまり諸使用価値の唯一の源泉であると宣言した。」(MEGA II/2, S. 136.)

以上のところから、マルクスが第2部第1稿で real という語を、貨幣から商品へ、商品から貨幣へ、という社会的形態の変化だけにかかわる formal, formell にたいして、使用価値の変化をもたらす、あるいはそれを準備する、という意味で使ったことが分かる。

4. 第3章プランでの「流通 (再生産) の実体的諸条件」の意味は?

第1稿で、real ないし reell が以上のような意味で使われていることを念頭におけば、第1稿末尾の第3章プランで第1節に「流通 (再生産) の実体的諸条件」というタイトルをつけたときにマルクスがここでの「実体的諸条件」という語で考えていたものが見えてくる。

第1稿の第3章で、マルクスは、社会的総生産物を使用価値の観点から消費手段として消費される生産物と生産手段として消費される生産物との二つの部類に区別し、これに対応して、社会の総生産を消費手段生産部門と生産手段生産部門との二大部門に区別したうえで、両部門の総生産物 = 総商品の価値諸成分——すなわち不変資本価値、可変資本価値、剰余価値——が、

9) このような意味では、労働が具体的有用的労働の側面でのみ意義をもつ労働過程も「実体的な過程」と呼ぶことができる。マルクスは第4稿で次のように言っている。

「生産手段は実体的労働過程 [realer Arbeitsprozess] で、異なった仕方での生産物形成者として、つまり労働手段および生産材料として機能する。」(MEGA II/4.3, S. 393.)

流通過程における形態的な諸変態 W_G_W を通じて互いに転換しあい、それぞれの W が他の W によって自己を補填する過程——これは労働者の W すなわち労働力 (Ak) が形態的な変態 $W(Ak)_G_W(Km)$ を通じて、自己を再生産すべき消費手段 (Km) に転換する過程を含むべきものである——を分析し、「この経過が進行しうるための実体的な諸条件」(MEGA II/4.1, S. 302), 「こうした交換の実体的な諸条件」(MEGA II/4.1, S. 306) を研究する。この「諸条件」が「実体的」と呼ばれているのは、まさに、そうした流通過程、したがってまた再生産過程が、生産過程——ならびに労働者の個人的消費過程における労働力の再生産——における実体的な変態によって規定される、社会的総生産物の使用価値のさまざまな姿態の相違によって制約されている、ということによるのである。

第3章の課題が、このような意味での「流通(再生産)の実体的諸条件」を解明することにあるとするならば、流通過程を通じての「転換」によって「補填」され、再生産されるべき社会的再生産の諸要因とは、なによりもまず、自然素材ないし使用価値の観点から見られた諸要因だということになる。ここで肝心なのは、「実体的な素材変換」(MEGA II/4.1, S. 327)であり、「社会によって生産される総商品資本の素材変換」(MEGA II/4.1, S. 343)である。

もちろん、この「実体的な素材変換」では、両部門の生産物のうちの不変資本価値部分は生産手段の形態に転換されなければならず、可変資本価値部分は労働力の形態に転換されなければならず、労働力の転化形態である労賃は消費手段の形態に転換されなければならず、剰余価値部分は単純再生産のもとでは消費手段の形態に、拡大再生産のもとでは消費手段に加えてさらに生産手段および労働力の形態に転換されなければならない。そのかぎりでは、この「実体的な素材変換」は、両部門の生産物の内部での価値から見た構成部分によっても条件づけられており、制約されている。このことは、マルクスが第1章の冒頭で、「第3章で行なうように、流通過程を現実の [wirklich] 再生産過程および蓄積過程として考察するさいには、たんに形態を考察するだけではなくて、次のような実体的な [reell] 諸契機が付け加わる」と言って、まず「(1) 実体的な [real] 再生産……に必要な諸使用価値が再生産され、かつ相互に条件づけ合う、その仕方」を挙げたあと、さらに、「(2) 再生産は、再生産を構成するその諸契機の、前提された価値・価格諸関係によって条件づけられているのであるが、この諸関係は、諸商品がその価値で売られる場合は、労働の生産力の変化によって生じるその真実価値の変動によって変化しうるものである」ということ、および、「(3) 流通過程によって媒介されたものとして表現される不変資本、可変資本、剰余価値の関係」、の三つを挙げているところに見ることができる (MEGA II/4.1, S. 140-141)。

しかし、 $c+v+m$ という資本の生産物の価値区分そのものは、第1章および第2章での分析のなかで解明されているのであり、第3章ではその分析結果を前提して、それにあらたに、各個別資本が生産する生産物の使用価値の相違が、生産手段生産部門および消費手段生産部門という二つの、異なった使用価値を生産する部門というかたちにまとめられて付け加わってく

るのであって、そこに、新たに解明されなければならないものとして、第1章および第2章では問題になりえなかった「流過程および再生産過程の実体的諸条件」が登場するのである。このような「実体的諸条件」を把握するために、再生産過程を媒介する流過程 W_G_W を分析するさいには、この変態の始点である W の使用価値と終点である W の使用価値との違いが決定的である。これを媒介する貨幣流通は、それ自体としては形態的な (formell) 契機に属するのであり、これを度外視することによって実体的な転態が求める「実体的諸条件」をつかみだす、というのが、第1稿の第3章でなによりもまず果たさなければならない課題としてマルクスが意識していたものだった、とすることができるであろう。

5. 「貨幣流通なし」と「貨幣流通を伴う」との二段構えによる叙述方法

そこからマルクスは、単純再生産においても、蓄積 (拡大再生産) においても、まずは、媒介する貨幣流通を捨棄した叙述を行ない、それに、その過程を媒介する貨幣流通を明らかにする叙述を加える、という二段構えの仕方、流過程およびそれによって媒介される再生産過程の全体を叙述しようと考えた。さきに見たように、第1稿で、第3章にはいってまもなく、マルクスは、「資本の総流過程 = 再生産過程のこれまでの考察では、われわれはこの過程が経過する諸契機あるいは諸局面を、ただ形態的に [formell] 考察してきただけであった。これにたいして、今度はわれわれは、この経過が進行しうるための実体的な [real] 諸条件を研究しなければならない」(MEGA II/4.1, S. 302) と述べたうえで、次のように書いている。

「これまでの考察から、次のことが明らかになっている。——貨幣は、一方では、諸商品が一般的消費ファンドにはいるための通過点として役立つにすぎず、また資本が可変資本であるかぎりでは、貨幣は、労働者たちにとっては、彼らの消費用の必需品を買うための通貨に帰着するのであり、他方では貨幣は、資本が完成生産物の形態から自己の対象的な生産諸要素の現物形態に再転化するための通過点として役立つにすぎない。そのかぎりでは資本の貨幣形態は、商品の変態 W_G_W における貨幣一般と同様に、再生産の、媒介的かつ瞬間的な形態として [機能する] にすぎないし、また、現実的再生産過程そのものとはなんのかわりももたない。ただ一つの例外をなすのは、貨幣資本すなわち貨幣形態にある資本が遊休資本を表わし、またそれが、生産資本として機能することが予定されてはいるがまだ現実にはそうしたものとして機能していないというその合い間にある資本を表わしている場合である。したがってそれは、この形態ではまだ流過程および再生産過程にはまったくはいていかない。それゆえ、以上に述べたところから次のことが出てくる。——貨幣は、それが資本の形態として現実に機能するかぎりでは、現実的再生産過程の形式的かつ瞬間的な媒介にすぎない。貨幣は、それが自立して自己を固守するかぎりでは、再生産過程にはまったくはいていないのであり、ただ、それにはいることが予定されているだけである。し

たがってどちらの場合にも、実体的な再生産過程の考察のためには、貨幣をひとまず捨象することができるのである（つまり、資本が貨幣に形態的に転化すること、資本が貨幣形態を周期的にとることが、摩擦なしに行なわれるものと想定する場合には [そうすることができるのであり]、またじっさいわれわれはさしあたりこのように想定するのである）。それゆえわれわれは、この考察においては貨幣流通（および貨幣資本としての形態にある資本）を捨象する。われわれはそれを、せいぜい、現実的再生産過程を考察することによって貨幣流通にとっての特殊の規定がこの過程の契機として生じてくる場合に、ときおり考慮に入れるだけである。」(MEGA II/4.1, S. 302 305.)

見られるように、「この考察においては貨幣流通（および貨幣資本としての形態にある資本）を捨象する」、すなわち、貨幣流通だけでなく、貨幣資本の形態にある資本までも捨象する、と明言されている。貨幣資本を捨象する、ということは、さきにも見たように、このあとでマルクスが次のように言明しているところにも、はっきりと現われている。

「さらに資本主義的生産様式が、支配的に行なわれている生産形態であるばかりでなく、一般的かつ排他的な生産形態であると前提されているのだから、資本家にとってであれ労働者にとってであれ収入をなす諸商品も、不変資本の構成要素をなす諸商品も、まずは資本の生産物として、それゆえまた商品資本として存在するのでなければならない。それゆえ、収入にはいる商品資本と収入にはいる他の商品資本との交換、ならびに、収入にはいる商品資本と不変資本を形成する商品資本の相互のあいだの交換が行なわれなければならない。こうした交換の実体的な [real] 諸条件を研究することがわれわれの今度の仕事なのである。」(MEGA II/4.1, S. 306.)

つまり、つかむべきは商品資本相互間の交換——「資本と資本との交換」という表現が示していた問題把握の制限性はここではとりあげないことにする¹⁰⁾——の「実体的諸条件」なのであって、この「交換」のなかに現われる貨幣資本の形態も、媒介する貨幣流通も度外視しよう、というのである。

そこで、このように述べたあと、第3章の最初の節である「資本と資本との交換、資本と収入との交換、および、不変資本の再生産」の叙述を開始する。ところが、貨幣流通を捨象すると宣言したばかりなのに、筆はおのずから、貨幣流通にかかわる問題に触れることになっていった。そこで、草稿で6ページほど書き進めたところでマルクスは、次のように書かざるをえなかった。

「最終的な叙述では、この第1節を、(1) 総再生産過程における諸商品資本の現実的素材変換、(2) この素材変換を媒介する貨幣流通、という二つの部分に分離したほうがよいであろう。いまそうなっているように、貨幣流通を考えに入れることは、たえず展開の脈絡を破

10) 前出の脚注3を見られたい。

ることになるからだ。」(MEGA II/4.1, S. 314.)

このような断り書きをしたので、いわば「安んじて」、マルクスは第1節のこのあとの部分でも、貨幣流通および貨幣資本に折に触れて言及しているのであって、ここでの叙述が「貨幣流通なしの叙述」になっているとはとうてい言いえない。マルクスは、ここではとりあえず筆のおもむくままに書けることを書いておき、のちにそれを整理して、二段構えの叙述にまとめよう、と考えていたと見える。

マルクスはこのあと、第2節の「収入と資本。収入と収入。資本と資本。(それらのあいだの交換)」で、第1節への補足を行なった¹¹⁾のち、再生産過程における固定資本の役割について述べた第3節、見出しを欠くが明らかに再生産の弾力性を論じた第4節を経て、単純再生産を前提にした分析を終える。続いて「第5節 蓄積、すなわち、拡大された規模での再生産」を書いたが、この叙述は蓄積についての第一段目の叙述すなわち「貨幣流通なしの叙述」となるべきものであって、その次に第二段目となるべき「第6節 蓄積を媒介する貨幣流通」が置かれている。ところが、その冒頭ではいきなり、「蓄積を媒介する貨幣流通が、さらに特別に論じられるべきなんらかの問題を提出するかどうかには、疑問がある」(MEGA II/4.1, S. 359)、と書く。のちの第8稿での「蓄積または拡大された規模での再生産」の分析では、さまざまの観点から「蓄積を媒介する貨幣流通」および貨幣の諸機能を明確に把握することに精力が傾けられていることを考えれば、ここでのマルクスには、「蓄積を媒介する貨幣」にかかわる重要で多様な解明すべき問題、論点の所在はほとんど見えていなかったように見える。

第3章の執筆を打ち切ったのちに書き付けられた第3章プランでは、「3) 蓄積、あるいは拡大された規模での再生産」に、付属する項目として「3a) 蓄積を媒介する貨幣流通」と書いていて、この問題についてもやはり「特別に論じ」ようと考えていたことを示しており、マルクスはここでも、「蓄積、あるいは拡大された規模での再生産」を、まず貨幣流通を捨象して論じたのちに、それを媒介するものとしての貨幣流通を論じることができるし、そうしようと考えていたのである (MEGA II/4.1, S. 381)。

なお、「再生産」の分析のなかで蓄積(拡大再生産)を論じるさいに、まず貨幣流通を捨象して叙述し、そのあとで媒介する貨幣流通を叙述する、という二段構えの方法を取るべきだ、

11) 第2節の最後のパラグラフの拙訳(『資本の流通過程——『資本論』第2部第1稿——, 大月書店, 1982年, 253ページ)のなかに訂正が必要な箇所があるので、この機会に付記しておく。拙訳で、「収入または資本を表わすというような属性が商品にはない(まるで商品を表わすというような属性が生産物にはあるかのようだ)」となっている部分のうちの二箇所の「このような」は「物的な」に訂正して読んでいただきたい。もとのままではなにを言っているのかよく分からないであろう。このときの訳文の作成には、モスクワのML研から提供を受けた解読文のコピーによって行なったのであるが、解読文では「このような」とした語は *dergleich* となっていて意味をとることができず、無理やりに「このような」と訳して済ませておいたのであった。MEGA ではこの語は *dinglich* と読まれており、これで意味がとれるようになった。この語の解読に疑問をもったものの、手もとに置いていた質のよくない手稿コピーでは解読の誤りを訂正することができなかったのである。

という考えは、じつはすでに、『1861-1863年草稿』のノート第XXII冊に書かれた「再生産」(MEGA II/3.6, S. 2243-2283)のなかに見られる。

マルクスは、「剰余生産物が剰余資本に転化される」という蓄積について言及するさいに、角括弧に入れた挿入的記述の冒頭で、「事柄は、まず貨幣を考慮に入れないで述べ、それから貨幣を考慮に入れて述べるべきである」(MEGA II/3.6, S. 2258)、と言って、「貨幣なし[の場合]」について論じたのち、その最後に、「貨幣を伴うケースは、のちに考察しなければならない」(MEGA II/3.6, S. 2260)、として、この挿入的記述を終えている。ここで言う、「事柄は、まず貨幣を考慮に入れないで述べ、それから貨幣を考慮に入れて述べるべきである」という叙述方法は、明示されてはいないものの、単純再生産の分析のさいにも採用される叙述方法だと考えられていたのではないと思われる。もしそうだとするなら、かの二段構えの叙述方法は、すでに『1861-1863年草稿』の執筆中に構想されていて、それが第2部第1稿でも引き継がれたものだったということになる。

6. 第2稿第3章のタイトル「流過程および再生産過程の実体的諸条件」の意味は？

マルクスは第1稿の第3章で、単純再生産および蓄積(拡大再生産)のそれぞれについて、まず、媒介する貨幣流通を捨象した叙述を行ない、それに、過程を媒介する貨幣流通についての叙述を加える、という二段構えの叙述方法をとるべきだと考えたが、上で見たように、第1稿での叙述では実際にこの叙述方法に従うことができなかった。そこでマルクスは、新たに書き始めた第2稿では、その第3章で、第1稿では実行できなかった二段構えの叙述を実現しようと考えていた。

マルクスは、第1稿の最後のページに書き付けた第3章プランではこの章の第1節のタイトルとしていた「流通(再生産)の実体的諸条件」という句を、第2稿の第3章冒頭で、いわば一段の格上げを行なって、第3章全体のタイトル「流過程および再生産過程の実体的諸条件」にした。これによって、タイトルで見ると「流過程および再生産過程の実体的諸条件」の解明は、第3章でなによりもまず明らかにされるべき中核的課題という位置から、第3章がその全体をもって答えるべき課題という位置に引きあげられたのであった。

そこで、第3章全体が解明すべきとされている「流過程および再生産過程の実体的諸条件」とはどのようなものか、ということが、この章そのものなかで明示的に説明されることが期待される。とりわけ、「実体的諸条件」の意味するところが述べられていしかるべきであろう。ところが第2稿では、この「実体的諸条件」という語そのものが、このタイトルのなかにあるだけで、それ以外にはまったく書かれていないのである¹²⁾。だから、この「実体的諸条件」の

12) ただし、第2稿とほとんど並行的に書かれた第4稿には、「再転化の実体的諸条件 [d. reellen Bedingungen d. Rückverwandlung]」という句がある。ここでの「再転化」とは、資本価値の生産

意味するところは、第1稿でこの語が使われていたときに考えられていたものと同じだったのか、それとも、その後になにか違いが生じていたのか、ということが問題になる。「実体的諸条件」という語が使われていないのだから、ここでは、第1稿についてもそうしたように、「実体的諸条件」と密接な関係があるはずの「実体的変態」という表現について、なにか変化が生じていなかったか、見ることにしよう。なお、第4稿も、MEGA II/4.3での考証¹³⁾に従って、第2稿とほぼ同時期に、これと絡み合いながら書かれたものと見なし、第2稿と同時期のものとして扱うことにする。

まず、「実体的 [real, reell] 変態」という語について言えば、次の二つの点では、第1稿で意味していたことがそのまま維持されていることが容易に確認できる。すなわち、第1に、資本の循環に含まれる、 G_W 、 P (生産過程)、 W'_G' 、という三つの変態のうち、 G_W および W'_G' は、流通過程で資本が貨幣から商品に、またその逆に、自己の形態を変える、という意味で「形態的変態」であるのに対して、 P (生産過程) は、「生産資本の実体的諸要因」(MEGA II/11, S. 304 u. 344; MEW 24, S. 316 [エンゲルス版では real が stofflich に書き換えられている] u. 355) がそれらとは使用価値を異にする生産物に変わる過程という意味で「実体的変態」である。第2に、同じ流通過程に属する G_W および W'_G' のうちで、 W'_G' は純粋に形態的な変態でしかないのに対して、 G_W のほうは、形態的変態であると同時に、資本が貨幣から「生産資本の実体的諸要因」に転化する、という意味で「実体的変態」である。

ところが、第2稿では、 P (生産過程) が「実体的変態」と呼ばれるのに、生産諸要因すなわち生産手段および労働力が生産物に変わるという使用価値の変化という意味のほか、明らかにもう一つの意味が付け加わったのである。すなわち、この過程を通過するなかで資本価

諸要因への再転化のことである。

「ここでは意図的に再転化の実体的諸条件には立ち入らない。というのも、ここでは形態が問題なのだから。」(MEGA II/4.3, S. 308.)

13) 前記拙稿では、この第4稿について、次のように書いておいた。

「この草稿は、その一部がのちに見る第2稿の執筆と並行して、あるいは絡み合いながら執筆されたもので、その執筆時期を正確に確定することが困難であるため、いまのところ大まかに1868年に書かれたものと推定されているだけである。目下フォルグラーフのもとで進められている第II部門第4巻第3分冊の編集作業のなかで、もっと正確な推定がなされるかもしれない。」(前記拙稿、『経済』2009年3月号, 150ページ。)

第4巻第3分冊は2012年秋に刊行され、編集者(フォルグラーフ)による執筆時期の推定が示された。第4稿についての付属資料での成立史では、タイトルに「1868年春に執筆開始、なんどかの中断を伴いながら、1868年末まで執筆が続けられたかもしれない [Beginn Frühjahr 1868, mit Unterbrechungen bis möglicherweise Ende 1868]」としたうえで、第2稿の内容と第4稿の内容とを対比する考証的検討を行ない、第2稿のなかに第4稿から取られた部分があり、第4稿のなかに第2稿から取られた部分があることなどを挙げて、この両稿がほぼ同一の時期に絡み合いながら執筆されたことを記述している (MEGA II/4.3, S. 759-762)。

値が増大する、量的に変化する、という観点である。こうして、*P* (生産過程) は、二重の意味で「実体的変態」と呼ばれることになった。このことをはっきりと示している箇所を第4稿および第2稿から挙げておこう。

まず第4稿から。

「生産過程では、資本の実体的変態 [die reelle Metamorphose] が、つまり新生産物への資本の転化および資本の価値増大が行なわれる。」¹⁴⁾ (MEGA II/4.3, S. 292.)

次に第2稿から。

「資本価値の生活行程における第2段階は、その生産的消費、すなわち、生産過程、しかも資本主義的生産過程である。たんに形態的な変態が行なわれる第1段階、つまり貨幣と資本との位置変換、貨幣形態から商品形態への価値の転化と比べると、この第2段階は、資本価値の実体的変態 [die reelle Metamorphose] を、しかも一種の二重の変態 [eine doppelte Metamorphose] を含んでいる。一方では、素材的な変態 [eine stoffliche Metamorphose] が生じる。新生産物が創造されるのであり、この結果のうちに労働過程は消える。この生産物は、その現物形態によって、商品市場で買われた生産物形成者とは区別される。……しかし第2に、労働過程であるかぎりでの生産過程の結果であるこの素材的な変態のほかに、商品価値についての価値変化が生じる。これは価値増殖過程であるかぎりでの生産過程の結果である。」 (MEGA II/11, S. 11. この引用でも次の引用でも「資本価値」をゴシックにしているが、その理由はこのあとすぐ述べる。)

「資本価値が、長短の時間を経て、流通部面から生産部面に舞い戻り、ここでその現物形態ならびに価値量の実体的変態 [eine reale Metamorphose] を経過し終えたのちに、はじめて、第2の行為である販売が第1の対立する行為の購買を補足する。」 (MEGA II/11, S. 12.)

マルクスは、のちに1877年春に、ふたたび第2部の仕事に立ち戻ろうとして、以前に書いた諸草稿のなかの利用すべき箇所への指示ないし摘要を作成した。MEGA 編集者はこれに「以前の叙述 (第1-4稿) のうちの利用すべきテキスト諸箇所」という、いささか回りくどいタイトルを付けているが、これは、エンゲルスが彼の第2部序文で「最後の改訂のための覚え書」ないし「四つの草稿からの指示や覚え書」と呼んだものである (MEW 24, S. 11)。

マルクスはこのなかで、上に挙げた第2稿での記述を含むノートページ (3ページ) を指示

14) なお、第4稿および第2稿には、次の同じ記述がある。

「生産過程における資本の実体的変態 [seine reale Metamorphose] を含む資本自身のこの循環の内部で、資本は同時に自己の価値量を変える。」 (MEGA II/4.3, S. 299; II/11, S. 31.)

ここでは、資本の実体的変態と価値量の増大とが同時に生じる、として、価値量の増大が資本の実体的変態のなかに含まれていないが、これは、資本の実体的変態と、それに伴う価値量の増大とを区別する、いわば過渡的な認識の段階がありうることを示唆していて興味深い。

して、この記述を次のように要約した。

「実体的変態 [reelle Metamorphose]。二重に、すなわち素材的に、つまり新生産物、第2に、価値変化、価値増殖過程。」(MEGA II/11, S. 541.)

以上のところからはっきりと読みとれるように、マルクスはいまや、生産過程は、労働過程としての観点において、および、価値増殖過程の観点において、ともに「実体的な変態」が生じる過程であり、前者においては使用価値の形態の変化が生じ、後者においては価値の量の変化 = 増大が生じるのだ、このような意味において、生産過程は二重の意味で「実体的変態」なのだ、という認識をもつようになったのである。

この認識は、じつは、第1稿までにはなかった、もう一つの概念的把握の誕生と結びついていた。それは、「資本価値 [Capitalwerth]」という概念である。

「資本価値」という概念は、きわめてありふれたもので、それが新たな概念的把握だなどと言うのは滑稽きわまる、という粗忽な論者もあるに違いない。

もちろん、マルクスは『経済学批判要綱』以前から、資本が運動するなかで増殖する価値であることを知っており、したがってそのような資本の価値を「資本価値」と呼んだことも当然にあってしかるべきだ、と言ってもいいであろう。

ところが、『経済学批判要綱』でも『1861 1863年草稿』でも、運動の主体としての「資本」についてはいたるところで語られているけれども、「資本価値」が資本の循環運動のなかで量的に増大して行く「主体」として注目されている箇所はほとんど存在しない。およそ、「資本価値 [Capitalwerth]」という語がきわめてわずかしが使われていないのである。

このいわば平凡きわまる「資本価値」という概念は、いま見ている第2部の第4稿および第2稿で使われ始めると、このあと、重要な概念としていたるところに登場するようになるのである。

まず、上に引用した、二重の意味での「実体的変態」についての第2稿からの記述を見られたい。ここでゴシック体にしておいた「資本価値」という語を注視されたい。「資本価値の生活行程 [Lebenslauf]」、「資本価値の実体的変態」、「資本価値が生産部面でその現物形態ならびに価値量の実体的変態を経過する」、というように、ここでの主体は、たんに「資本」と呼ばれるのではなくて、「資本価値」と言われているのである。第1稿では、変態の主体は、商品の変態 W_G_W では商品であり、 $G_W\dots P\dots W_G$ では資本であった。そこには「資本価値」という語はまったく登場していなかった。

これにたいして、第4稿および第2稿では、「資本価値」は、過程を進行していく (prozessierend) 主体を表現するきわめて重要な概念として使われるようになるのである。

第4稿および第2稿のなかで、上掲の引用のほかに、どのように使われているか、見ておこう。

「流過程の内部でのこの形態変態 [Formmetamorphose] は、同時に、資本価値の実体

的変態の一契機である。」(MEGA II/4.3, S. 308.)

「最後に、一般的商品流通の内部で資本価値が描く自立的なものは、資本価値が部分的には形態的な [formell], 部分的には実体的な [reell], 一連の変態を通過したのちに、それ [資本価値] がふたたびそれ [資本価値] の当初の貨幣形態に戻る、ということ、ただ、この貨幣の量的な変化が生じる、ということに示される、——言い換えれば、資本家が最初に流通に投じた貨幣が最後には彼のもとに——しかも増加して——還流する、ということに示される。」(MEGA II/11, S. 15.)

「これは、過程を進行する資本価値 [der prozessirender Kapitalwerth] の実体的変態 [die reale Metamorphose] である。」(MEGA II/11, S. 26.)

「一方では、どの個別資本も、自己の対立した流通の両半 G_W および W'_G のなかで、一般的商品流通の起動者(要因)をなし、この一般的商品流通のなかで貨幣として、あるいは商品として機能し、商品世界の諸変態列のなかでつなぎ合わされている。他方では、どの個別資本も、一般の流通の内部で、生産部面を一つの通過段階とする自己自身の自立的な循環を描くのであって、この循環のなかでは、一般の流通の内部でそれが取ったりまた捨てたりする諸形態は、ただ、過程を進行する資本価値 [der prozessirender Kapitalwerth] の機能的に規定された諸形態にすぎず、またこの循環のなかでは、どの個別資本も、自己の出発点に、それが出発点をあとにしたときの形態で戻ってくるのである。生産過程における資本の実体的変態 [seine reale Metamorphose] を含む資本自身のこの循環の内部で、資本は同時に自己の価値量を変える。それが還流するのは、貨幣価値としてだけではなく、大きくなった、増大した貨幣価値としてなのである。」(MEGA II/11, S. 31.)

見られるように、ここでは「資本価値」は過程を進行していく (prozessierend) 主体となっている。マルクスはこの時期以後、資本が運動して価値増殖する過程を描くのに、その運動の主体をたんに「資本」とするのではなく、きわめてしばしば「資本価値」と表現するようになる。これは、自立化した価値(資本)が、一方ではその担い手である使用価値の形態を変えながら、他方では価値量を変えていく二重の過程であることを明示的に表現しようとした結果だと考えることができるであろう。

このように、第1稿での「再生産の実体的変態」では、それが「実体的」と呼ばれたのが、資本の使用価値の形態変化についてであったのにたいして、第2稿での「資本価値の実体的変態」では、いまや、使用価値の形態の変化についてだけでなく、価値の量的変化についても「実体的な変態」と呼ばれるようになったとすれば、第3章のタイトルとされた「流過程および再生産過程の実体的諸条件」についても、それに対応する意味の変化があったと考えるのが至当であろう。

あらためて第1稿での「流通(再生産)の実体的諸条件」(第1稿末尾の第3章プラン)における「実体的諸条件」の意味を振り返れば、第1稿での記述によるかぎり、基本的には、消

費手段がそれを収入として消費する資本家ないし労働者の手に、生産手段がそれを不変資本として補填する資本家の手に、それぞれ到達するための、消費手段および生産手段という特定の使用価値形態をとる商品生産物ないし商品資本の相互の交換が行なわれるための諸条件という意味であった。

それでは、「実体的」という語が、さきに「資本価値の実体的変態」について見たように、使用価値形態の転化にかかわる、という意味だけでなく、資本価値の増大・変化にかかわる、という意味をもつことになったとすれば、「流通過程および再生産過程の実体的諸条件」という句は、どのような新しい含意を得ていると考えられるであろうか。

それは、まさに、いま最後に見た第2稿からの引用——これが書かれているのは第1章の資本循環論のなかである——で述べられている二重の観点から見られた「諸条件」という含意である。

すなわち、一方では、どの個別資本も、「一般的商品流通のなかで貨幣として、あるいは商品として機能」し、 G_W および W'_G' によって「商品世界の諸変態列のなかでつなぎ合わされて [verkettet] いる」、という観点、他方では、個別資本が「一般的商品流通の内部で取ったり捨てたりする諸形態」は、「過程を進行する資本価値の機能的に規定された諸形態」にすぎず、どの個別資本も、「生産部面を一つの通過段階とする自己自身の自立的な循環」を描いて、つねにその出発点での形態に戻ってくる」、という観点、この二重の観点である。

もちろん、一般的商品流通の内部で「つなぎ合わされている」のは、個別資本の自立的な循環の相互のあいだだけではなく、さらに、資本家の剰余価値を表わしている商品生産物 = 商品資本の価値部分の自立的な変態、および、労働力の W_G_W という商品変態をも加えなければならない。しかし、資本価値の自立的循環、剰余価値の自立的変態、労働力商品の自立的変態、の三つの循環ないし変態をそれぞれ自立的な運動としてとらえて、これらの自立的な運動相互間の「つなぎ合わせ [Verkettung]」ないし「絡み合い [Verschlingung]」をとらえる、という視点のかなめは、過程の全体を統括する [übergreifen] 資本の運動を「過程を進行する資本価値」の自立的循環としてとらえることにある。この把握の徹底は、剰余価値の自立的変態運動および労働力商品の自立的変態という他の二つの自立的運動をそのようなものとしてとらえて、これらと「過程を進行する資本価値」の循環との「絡み合い」を解明する、という新たな視点を切り開くことになるのである。ここで「新たな視点」というのは、第1稿では、社会的再生産過程を三つの異なる自立的な変態ないし循環の「絡み合い」としてとらえる観点が、ときおりあちらこちらで見え隠れしてはいても、基本的な視角とはなっていなかったのたいして、第2稿では、まさにこの観点こそが、社会的再生産過程を分析するさいの基本的観点となっているからである。ここに、第1稿に対する第2稿の「新しさ」がある。

以上を端的に示しているのが、第2稿で、第3章に「流通過程および再生産過程の実体的諸条件」というタイトルをつけたすぐあとで、第1部との対比において、さらに第2部の第1章

および第2章との対比において、この第2部第3章で行なうべき分析を特徴づけた記述である。そこでは次のように言われている。

「個別資本の循環は、互いに絡み合い、互いに前提し合い、互いに条件をなし合っているのであって、まさにこの絡み合いというかたちをとって社会的総資本の運動を形成している。単純な商品流通の場合に一商品の総変態が商品世界の変態列の環として現われたように、いまでは個別資本の変態が社会的資本の変態列の環として現われる。しかし、単純な商品流通は決して必然的には資本の流通を含んではいなかったが——というのも、それは非資本主義的な生産の基礎の上でも行なわれうるのだからである——、すでに述べたように、社会的総資本の流通、循環は、個々の資本の循環には属さない商品流通、すなわち資本を形成しない諸商品の流通をも含んでいる。／そこで今度は、社会的総資本の構成部分としての個別諸資本の流過程（その総体において再生産過程の形態であるもの）が、つまりこうした社会的総資本の流過程が、考察されなければならない。」(MEGA II/11, S. 342-343; MEW 24, S. 353-354.)

第3章の課題についてのこの特徴づけは、新たな第2稿の段階でマルクスが第3章の対象に据えたものをはっきりと示しており、マルクスがしっかりと獲得した見地を正確に表現している。

第3章がこのような見地でこのような対象を分析するのだとすると、この章につけられたタイトル「流過程および再生産過程の実体的諸条件」はそれに相応しいものだったであろうか。もし、このタイトルのなかの「実体的諸条件」がかつての第1稿での意味のものでしかなかったとすれば、このタイトルは新たな第3章の内容を適切に表現するものではないと言うべきであろう。しかし、「実体的」という語が、いま見てきたような、「資本価値が使用価値の形態を転化させ、かつ価値を増大させながら過程を進行していく」という新たな含意をもつようになっていたのだとすれば、「実体的諸条件」とは、資本価値のこのような過程進行の諸条件という意味に理解することも不可能ではない。そして、そのように見るかぎりでは、第3章のかのタイトルはこの章の内容を表現していると言うこともできるであろう。

マルクスは、第2稿の執筆を打ち切ったのちに、「目次 [Inhalt]」という見出しのもとに、この草稿の表紙としていた紙葉に内容目次を書きつけた。これは、草稿の該当ページもつけられていることから明らかのように、それ自体としてはすでに書いてある草稿の内容について作成された「目次」であって、最終的に仕上げようとする第2部完成稿のためのプランではなかったが、しかし、あちこちで草稿の内部での表題に手を加え、また、のちに採用すべき用語を明示したり¹⁵⁾したほか、第3章については、草稿では筆が及んでいなかった「拡大された規

15) たとえば、第2章の資本回転論では、草稿本文でどちらを採るべきか試行していた「流動資本」に当てるべき語を、flüssiges Kapitalではなく、circulirendes Kapitalにすることをここで最終的に確定したとみられるのである。

模での再生産。蓄積」の項目を書き加えているところからもわかる¹⁶⁾ように、この時点での彼の第2部構想を示すものと見ることができるものである (MEGA II/11, S. 34)。そして、この内容目次では、第3章のタイトルは、草稿本文でのタイトルと同じ「流過程および再生産過程の実体的諸条件」となっている。ここからわかるのは、彼は少なくとも第2稿摺筆の時点では、これを第3章のタイトルにするつもりでいたのだらうということである。

しかし、第2稿でのあらたな第3章を、上記のようなその対象、課題、分析の見地から見たとき、このタイトルがそれらを適切に表現できているかどうか、疑問が残る。少なくとも、「実体的諸条件」という語でどういうことを意味しているのか、明示的に説明されるべきであったらう。しかし、肝心のこの第2稿で、マルクスはこのタイトルのなか以外には、この語そのものをまったく使わなかった。

このことが示唆しているのは、あらたなより深い認識は、それが得られたときにいつでもただちにそれに相応しい概念や枠組みを獲得できるわけではなく、多くの場合、とりあえずそれ以前の概念や枠組みを使って表現されるのだ、ということである。このようなずれは、マルクスにかぎったことではない。それは、偉大な思想家たち、理論家たちの認識の深化の過程でつねに見られるものである。彼らの思想や理論の形成の過程を解明するさいには、一方で、生まれ育まれたあらたな認識やそれまでの認識の刷新を旧来の概念や枠組みのなかでの叙述のなかに発見することが必要であり、他方では、その新たなものが古い枠組みや概念によって受けている制約を見抜き、理論家たち自身によって古い概念や枠組みがついに脱ぎすてられていく過程をリアルに見ることが必要である。

マルクスは、第1稿で第3章のタイトルとして考えていた「流過程および再生産過程の実体的諸条件」を第2稿の第3章でもそのまま維持した。上で見たように、「実体的諸条件」という語には新たな意味が加えられており、マルクスはそのような意味をも込めて第3章のタイトルとして書きつけたのであろうが、すでに第2稿第3章の冒頭で記した、第1稿の段階をはるかに越えるこの章での問題意識を適切に表現するものとは言えなくなっていた。第2稿の「目次」ではなおこのタイトルが維持されているが、このあとの第2部諸草稿にはもはや「実体的諸条件」という表現は完全に消え失せる。これは、「実体的諸条件」という表現が新たに得られた第3章の内容にそぐわないものとなっていたからであろう¹⁷⁾。

16) 草稿のたんなる目次であれば、まだ書かれていない項目まで書きつけることはありえないからである。

17) 筆者は、前記の拙稿で、「第2稿の第1章では、価値増殖過程での価値量の変化(増大)をも「実体的変化」と呼ぶことによって、この「実体的」という概念は価値の量的変化をも含むものに拡張された」と述べたあと、「しかし、第3章での社会的総再生産過程における「実体的諸条件」のかなめが、生産諸部門間の転態を制約する使用価値的諸条件であることには変わりはない。第2稿の第3章の表題は、このことを表現していたのである」と書いた(前記拙稿、上、『経済』2009年3月号、154ページ)。この後段の部分を書くときには、この「拡張」がもっていた意味をまだ十分につかむこ

7. 二段構えの叙述方法という旧来の枠組みの制約とその突破

このような、新たな認識とそれを表現する枠組みとのずれが、もっと鮮明に読みとれるのが、さきに触れた、『1861 1863年草稿』にすでに萌芽があり、第1稿で第3章の叙述方法として採用することを決め、第2稿第3章で実際に枠組みとして使われた、社会的総再生産過程の二段構えの叙述方法と、マルクスが第3章で叙述しなければならないと考えていた内容とのずれである。この点については、説明が必要だと考えられる最小限のことは前記拙稿で書いておいた¹⁸⁾が、ここでは、さらに、その要点だけを述べておこう。

すでに述べたように、社会的総再生産の過程は、生産手段生産部門（第Ⅰ部門）と消費手段生産部門（第Ⅱ部門）との二部門に総括して考察する場合には、この両部門のそれぞれにおける、商品資本の循環、労働者の労働力の変態、資本家の剰余価値の変態という、六つの自立的な循環ないし変態が、商品の売買、すなわち商品と貨幣との位置変換によって絡み合うことによって進行する。この過程における貨幣の機能または形態規定性は、たんに流通手段としての媒介機能にとどまらず、それが蓄蔵貨幣として果たすべきさまざまな機能を含むものであって、それらの分析は、社会的総生産過程の解明にとって不可欠のものである。しかし、とりあえず、それらすべてのなかから——価値尺度としての機能は別として——貨幣が果たすべき最小限の機能を取りだせば、それは言うまでもなく、商品の流通を媒介する流通手段としての貨幣の機能である。「貨幣流通を捨象した叙述」とは、この機能を果たす流通手段としての貨幣をも捨象する、ということである。これを捨象するということは、言い換えれば、社会的総再生産過程における商品の販売および購買をすべて商品と商品との交換に還元する、ということである。

そこで、社会的総再生産過程での六つの自立的な循環ないし変態が、すべて、等価値量の商品と商品との交換によって絡み合い、進行するのだと考えてみよう。

その場合、第Ⅰ部門の内部での、不変資本価値を担う商品どうしの交換、第Ⅱ部門の内部での、可変資本価値を担う消費手段と労働力商品との交換、および、剰余価値を担う商品どうしのあいだでの交換、以上の三つの交換については、流通手段としての貨幣の媒介を度外視して考察できることは確かである。また、第Ⅰ部門の資本家と第Ⅱ部門の資本家とのあいだで行なわれる交換、すなわち前者のもとで生産手段の形態にある剰余価値と後者のもとで消費手段の形態にある不変資本との交換でも、流通手段としての貨幣を度外視しても理解することができ

とができておらず、「資本価値」概念がこの「拡張」と結びついて登場したことにまだまだ気づいていなかった。この部分は訂正されなければならない。

18) 前記拙稿、上、『経済』2009年3月号、155-157ページ。マルクスは第8稿で、二段構えの叙述方法を捨てて、当初から貨幣運動を全面的に組み入れて叙述を行なった。この点については、同拙稿、中、『経済』2009年4月号、131-135ページ、で述べた。

る。以上のすべての交換では、流通手段による媒介は、つねに双方向的に進行する販売および購買なのだから、この媒介を捨象すれば、等価値量の商品と商品との交換が残るのだからである。

ところが、第Ⅱ部門の商品資本のうちの不変資本価値を表わす部分が生産手段に転態し、第Ⅰ部門の商品資本のうちの可変資本価値を表わす部分が労働力に転態し、そして、第Ⅰ部門の労働者の労働力商品が彼らの消費すべき消費手段に転態する、という三つの転態については、事情はまったく異なっている。これらが貨幣流通によって媒介されるさいには、そこで行なわれる販売および購買はいずれも、買い手にとっての一方的購買、売り手にとっての一方的販売であって、媒介する流通手段を捨象すれば、そこに残るのは、第Ⅰ部門の資本家から第Ⅱ部門の資本家への生産手段の一方的移転、第Ⅰ部門の労働者から同じ第Ⅰ部門の資本家への労働力の一方的移転、第Ⅱ部門の資本家から第Ⅰ部門の労働者への消費手段の一方的移転、という商品の三つの一方的移転であって、等価値量の商品どおしの交換ではない。そこで、この三つの転換を、なんとかして、等価値量の商品どおしの交換に還元しようとするなら、次の二つのどちらかを想定するほかはない。第1：まず、第Ⅰ部門の資本家が、自己の商品資本のうちの可変資本価値が体化した部分を、第Ⅱ部門の商品資本のうちの不変資本価値が体化した部分のうちの一部と交換し、次に、これによって入手した消費手段を第Ⅰ部門の労働者の労働力と交換する、という想定。第2：まず、第Ⅰ部門の労働者が自己の労働力と第Ⅰ部門の生産物である生産手段と交換し、次に、こうして入手した生産手段を第Ⅱ部門の資本家もつ消費手段と交換する、という想定である。後者の想定は、第Ⅰ部門の生産手段と第Ⅱ部門の消費手段との交換を労働者が担うという、あまりにも現実離れした滑稽きわまりないものであるから論外とすると、前者の想定だけが残ることになる。

実際にマルクスは第2稿で、このように想定して、次のように書いた。

「われわれはここではまず、貨幣流通のない再生産過程を、だからまた貨幣資本が介在しない可変資本の前貸を考察する。いっさいの富が、総資本家階級の所有として、ここではわれわれが株式会社 [Jointstock Company] とみなすべき手のなかにある。一部分は、生産資本の姿をとって彼らの生産ファンドのなかにあり、他の一部分は、彼らの商品資本として市場にある（市場はここでは、個別の資本家たちが自分の商品をそれぞれ手持ちしている、総資本家階級の共同のバザール [Bazar] とみなすことができる）。彼らは労働者たちに資本の可変的部分を——ここで行なっている、貨幣流通を度外視する、という想定のもとでは——消費手段の形態で前貸するほかはない。彼らは300ポンド・スターリングの価値の消費手段を彼らの商品資本から引きあげ、これをもって300ポンド・スターリングの労働力を買う。この労働力はいまでは彼らの生産資本の一部となっており、彼らの生産過程に合体され、そして、活動している労働力として、生産過程における可変資本部分の現実的、素材的定在となっている。生産物、つまり商品資本では、前貸された労働力価値が再生産されており、

さらに剰余価値が加わっている。そしてこのことが、資本の流通としての資本の流通と見なされているのである。しかしここではわれわれは——問題となっているのは総生産物の再生産なのだから——、資本の流通に関わるだけでなく、資本家であろうと労働者であろうと、個人的消費にはいる商品生産物の諸要素にも関わらなければならないのである。」(MEGA II/11, S. 406 407.)

見られるように、「貨幣流通のない再生産過程を、だからまた貨幣資本が介在しない可変資本の前貸 [der Vorschuß d. variablen Kapitals ohne d. Dazwischenkunft des Geldkapitals] を考察する」という想定のもとでは、資本家は「労働者たちに資本の可変的部分を消費手段の形態で前貸するほかはない」ということになる。貨幣流通の媒介を捨象した叙述を行なうかぎり、このような結論に到達せざるをえないことは明白である。

ここに、「貨幣流通を捨象した叙述」と「貨幣流通を伴う叙述」ないし「それに伴う貨幣流通の叙述」という二段構えの叙述方法の決定的な問題点が現われている。

のちに第8稿でマルクスが繰り返して強調したように、社会的総再生産過程の根幹をなす資本価値の自立的循環では、貨幣形態での可変資本の前貸が、したがってまた可変資本の貨幣形態での還流が決定的に重要であって、社会的総再生産過程の分析では捨象することができないものである。「貨幣資本が介在しない可変資本の前貸」は、第1部第7篇の「第21章 単純再生産」での資本の再生産過程の把握では意味をもつ想定¹⁹⁾ではありえても、社会的総再生産過程の分析では、旧来の枠組みに囚われた叙述方法によってやむなくとらざるをえなかった、現実離れした想定だったと言わざるをえないのである。

マルクスは第8稿で、この二段構えの叙述方法を完全に放棄し、最初から、貨幣のもろもろの機能を度外視せずに、したがってまた貨幣資本を度外視せずに、これらを前提し、組み入れた叙述を行なった。これによって彼は、社会的総再生産過程の核心的な諸転換を明晰に解明することができ、旧来の枠組みを廃棄して、分析の内容に相応しいあたらしい枠組みを獲得したのであった。

おわりに

以上、本稿では、前記拙稿では立ち入って述べることができなかつた、第2部の第1稿から第2稿にかけてマルクスがしばしば使った「実体的変態」という語の意味するところを探り、それを手がかりにして、第2稿第3章の「流過程および再生産過程の実体的諸条件」というタイトルでマルクスがなにを考えていたのか、ということを考えてきた。

19) 「可変資本は、労働者が自己の維持と再生産とのために必要とし、社会的生産のどんなシステムのもとでもつねに自分で生産し再生産しなければならない生活手段のファンドまたは労働ファンドの一つの特殊な歴史的現象形態でしかない。」(MEGA II/6, S. 524 525; MEW 23, S. 593.)

最後に付言する。

新しい思想や理論的な認識の深化は、つねに、まずもって旧来の概念や枠組みのもとで生じてくるのだ、という自明の事理をはっきりと意識していること、——このことの大切さをあらためて痛感する。

旧来の概念や枠組みのなかでようやく生まれつつあるものを見つけだして、後年の成熟した認識はすでにここにあったではないか、と言いつのる人びとは、しばしば、新たに得られた認識とそれを表現する概念や枠組みとのずれを見ようとせず、それに気づかず、したがって、そのあとにくる、旧来の概念や枠組みがとりはらわれて、内容に相応しい概念や枠組みが採用されるようになっていく過程——仕上げのための苦闘の軌跡——を見ようとしない。そのような人びとには、思想や理論の発展の過程を形成史的につかむ、という作業の意味も方法もわかりようがないのである。

(2012年11月25日)